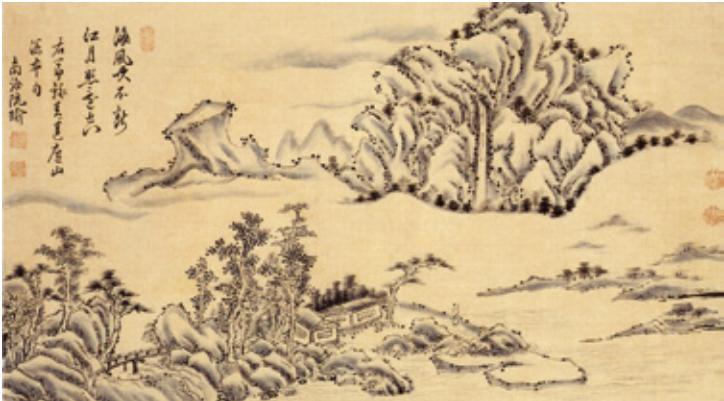




祇園南海《五老峰図》 田辺市立美術館蔵

絵画と出会う「この一点!」

きのくのにの三画人 Ⅲ. 野呂介石

会場：田辺市立美術館

会期：2021年12月25日（土）～2022年2月6日（日）

本作品は野呂介石が公務で江戸に向かう際に見た「赤富士」を、後年回想して描いたものです。介石は寛政11(1799)年6月と享和元(1801)年2月の2回、江戸へ向かったことが確認されており、その途中、各所で見た富士山の姿に感銘を受け、様々な情景の富士図を描いています。

この「赤富士」を見たのは、上部に書かれている賛から享和元年の時と考えられています。賛には「私はこの時初めて〃寒林の朝もやの中、陽の光に赤く染まる富士。を見てとても感動した。しかし、今までそのような現象を見たことがなかったので、この感動をうまく表現することが出来なかった。そこで、江戸に着いてから友人である柴野栗山や菅茶山【注：どちらも当時の著名な儒学者・文人】にこの景色のことを尋ねたところ、彼らはこの現象を既に知っており、ある人はこれを〃紅玉芙蓉。と名づけていた」と記されています(要約)。

介石はこの作品を描いた5年前にも、「赤富士」を見たときの感動を表した画を作成しています。その作品では夜明け前の薄暗い景色の中に赤く浮かぶ富士の情景を、墨の濃淡も駆使して忠実に表現しようとしています。

本作では細い墨の描線と濁いた淡墨で山の輪郭や林を表現するのみにとどめ、代赭の紅とのコントラストによって、〃寒林に赤く染まる富士。をより際立たせる効果を上げています。介石は晩年に至るまで多くの富士図を遺しましたが、この情景がよほど脳裏に深く焼きついていたのか、江戸出向の20年後、その経緯を賛に記した本作の制作に至りました。

介石は日本で最も古い「赤富士」を描いた画家と言われています。本作品はわが国で最も知られる、葛飾北斎の浮世絵版画「赤富士」(『富嶽三十六景』より《凱風快晴》)とは趣を異にする、文人画家・野呂介石による「真景山水の赤富士」です。

(主任 辰巳 充)



野呂介石《紅玉芙蓉峰図》 1821(文政4)年
(公財)協村奨学会蔵 [田辺市立美術館寄託]

田辺市立美術館へのきもち②

田辺市立美術館が平成8(1996)年11月に開館して、ちょうど今年が25周年ということを知った。少ない学芸員の数ながら、紀南地方の核となるミュージアムとして、展覧会や教育普及事業など、継続的に充実した活動をされてきたことに、あらためて敬意を表したい。

実は、今年はさまざまな記念の年が重なっている。私が勤務する和歌山県立博物館は、昭和46(1971)年4月に開館しており、創立50周年の年にあたる。和歌山県立紀伊風土記の丘も、同じ年の8月に開館しているので、同じく創立50周年である。さらに、県内で最も歴史の古いミュージアムである高野山霊宝館は、大正10(1921)年5月に開館しており、創立100周年を迎えている。ちなみに、廃藩置県により、現在の和歌山県の県域が最終的に確定したのは、今から150年前の明治4(1871)年11月である。

全国的に見て、文化財などの素材が多いにも関わらず、和歌山県内のミュージアムの数は多くはない。公立・私立を問わず、地域に散在するミュージアムが、規模は小さいながらも何とか踏ん張ってそれぞれの歴史を積み重ねているわけであり、田辺市立美術館も例外ではない。

田辺市立美術館は、紀州三大文人画家の優品を含む脇村氏のコレクションを基盤の一つとしているので、和歌山県立博物館の活動と重なる部分もあり、これまで収蔵資料の相互貸借など、密接な交流が続いてきている。近世紀州の文化を考える上で、とくに三大文人画家は欠くことのできない重要なテーマであり、今後ともに検討を深めていきたい。

ところで、『田辺市史』や『紀州郷土芸術家小伝』などの書籍をひもとくと、江戸時代、紀伊藩の附家老安藤家が支配していた田辺領、そしてその城下

には18世紀後半から学問や文芸で活躍する人びとが、さまざまな階層で散見される。画人としては、まず三栖組の真砂幽泉の名があげられるが、明治時代ごろにかけて、ほかにも現在ではほとんど無名の画人たちの活動がうかがわれる。作品の絶対数も少ないだろうし、技量的にも三大文人画家のレベルとは比べるべくもないが、こうした文化的基盤が近代的教育などと相まって、大正・昭和期の画家たちの台頭につながっていくのであろう。ほかにも、俳諧・和歌・漢詩・書などの分野も含め、この時期に田辺で活動した文人たちをさらに意識した方向性も、田辺市にある美術館の活動としてはあり得るのではないかと、丁度勤続30年を迎えた私の経験から思うところである。

(和歌山県立博物館主幹 竹中 康彦)



県立博物館エントランスにて玉石孔子像とともに

田辺市立美術館 NEWS ORANGE Vol.35

編集・発行：田辺市立美術館

発行年月日：令和3年10月1日

田辺市立美術館

〒646-0015 和歌山県田辺市たきない町24-43

TEL.0739-24-3770 FAX.0739-24-3771

http://www.city.tanabe.lg.jp/bijutsukan/

田辺市立美術館分館

熊野古道なかへち美術館

〒646-1402 和歌山県田辺市中辺路町近畿891

TEL.0739-65-0390 FAX.0739-65-0393

http://www.city.tanabe.lg.jp/nakahechibijutsukan/

田辺市立美術館NEWS

ORANGE

Vol.35



中西利雄《紅葉》1938(昭和13)年

田辺市立美術館蔵

作品紹介 中西利雄《紅葉》

水彩画を専門とした中西利雄(1900～1948)は、1928(昭和3)年から1931(昭和6)年にかけてのフランス留学を経て、不透明水彩絵具を用いた近代的な表現を日本の水彩画の世界に切り拓いていった。それは人物像において最も個性的な成果を成したが、風景画についても積極的に取り組まれている。海水浴場や競馬場といった、モチーフそのものが新鮮で、都会的な作品ばかりでなく、1938(昭和13)年の第3回新制作派協会展で発表された本作の様に、山間の紅葉という日本絵画の古典的な主題を扱っても、従来の淡く潤った水彩画の表現とは一線を画す内容で完成させている。中西の獲得したモダンな作風が、日本美術の装飾的な感覚の中で活かされた作例の一つで、水彩画の域を超えて日本近代の絵画表現をうかがう上でも貴重な作品といえよう。

(学芸員 三谷 渉)